

令和7年度 校内研究について

令和7年4月3日（水） 研究推進部

研究主題

未来の社会を創造する「自律的な学び手」の育成

～授業革新及び校務DXの推進を通して～

I 令和7年度校内研究 研究主題設定に当たって

(1) 実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
- 特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

- ◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる
- ◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

② 協働的な学び

- ◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- ◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す

- 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通して学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

2

文部科学省による、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（上図）で示されているように、これからの目指すべき教育の姿として、「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実」させて、「主体的・対話的で深い学び」を実現していかなければならない。こうした指導の下、子どもたちが自らの学習を自己調整して、自分に合った学びを自分で創り出していくことできる「自律した学習者」を育成していくことが大切である。そのために、一人一人に応じた多様な教材、学習時間、方法などを柔軟に提供し、自分に最適な学びを自力で計画・実行できる子どもを育成するための授業革新が必要であると考える。

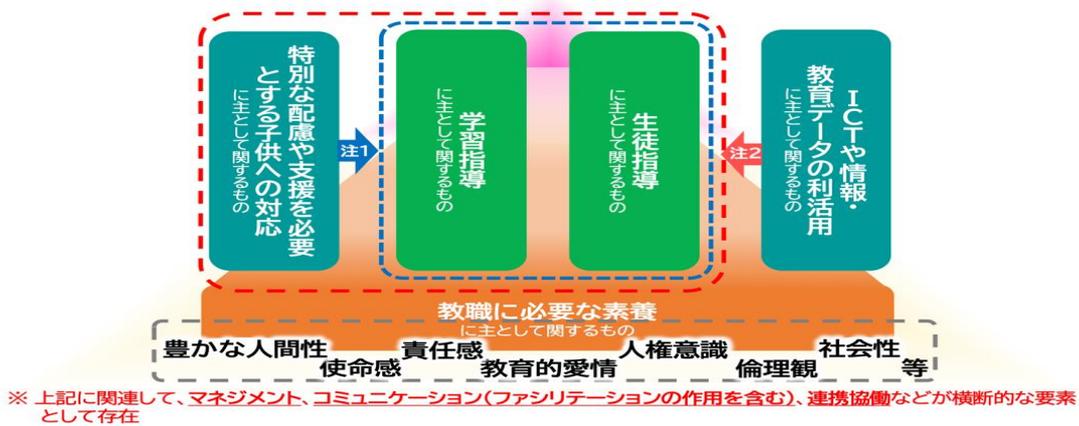
また、「OECD 学びの羅針盤（Learning Compass）

2030」では、「AAR サイクル」が学習モデルとして紹介されている。「AAR サイクル」とは、Anticipation（見通し）－Action（行動）－Reflection（振り返り）のステージを繰り返す学習プロセスのことである。これは、主に子ども一人一人を対象にした学習サイクルであり、こうした学習サイクルを柔軟に授業に取り入れていくことが大切だと考える。



(2) 新たな教師の学びの姿

公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針に基づく教師に共通的に求められる資質の具体的内容



授業革新を行っていくに当たり、上図のように、「令和の日本型学校教育」を担う「新たな教師の学びの姿」が中央教育審議会の答申で示されている。教師も子どもたちと同様に「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実」させていく必要があると考える。そのためには「校内研究」と「OJT」を連動させ、学びを充実させていくことで、「自律的な学び手」となり授業革新につなげていくことが大切だと考えた。このような教師に共通的に求められる資質に加えて、以下の視点をもって授業革新に取り組んでいく。

- 変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- 他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

(3) 研究の核とする教科について

本校の授業実践では、「総合的な学習の時間」の指導に課題が見られ、単元計画が形骸化していたり、例年通りの取組を義務的に実施していたりする実態がある。高学年教科担任制における時間割の制約の下、行事等の指導をやむを得ず「総合的な学習の時間」を割り当てている面も少なくない。そのため、「総合的な学習の時間」の計画を系統的に見直し、充実させていくことが大切だと感じた。また、具体的な活動や体験を通して自分の生活を豊かにすることを目指す「生活科」や、探究的な活動に主体的・協働的に取り組み自己の生き方を考えることを目指す「総合的な学習の時間」のねらいは、「自律的な学び手」の育成をするねらいにも適している。さらに、「総合的な学習の時間」は、

- ① 【課題の設定】 体験活動などを通して、課題設定をして課題意識をもつ
- ② 【情報の収集】 必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③ 【整理・分析】 収集した情報を、整理したり、分析したりして思考する
- ④ 【まとめ・表現】 気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

探究的な学習であり、各教科とも関連付けて学習できるため、専科を含め、どの教員も研究に携わることができると考える。以上のことから、来年度の研究は「生活科・総合的な学習の時間」を核とする。

令和7年度 校内研究 研究構想図（案）

【学校教育理念】

・ 自立 ・ 創造 ・ 共生

【これからの未来】

VUCA の時代

Volatility (変動性)

Uncertainty (不確実性)

Complexity (複雑性)

Ambiguity (曖昧性)

【今求められている学校教育】

・ 令和の日本型学校教育

「個別最適な学びと協働的な学びの充実」

・ 教育振興基本計画

「持続可能な社会の創り手の育成」

「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」

【練馬区教育振興基本計画】

「教育の質の向上」

「家庭や地域と連携した教育の推進」

「支援が必要な子どもたちへの取組の充実」

児童の実態

- ・ 受け身で学習することに慣れている。
- ・ 学びを見通して、自分自身で学習を進めていく経験が少ない。
- ・ 自身の学びを振り返り、表現することに難しさを感じている。

教師の思い

- ・ 「総合的な学習の時間」の単元づくり、探究のプロセスの指導が難しい。
- ・ 児童がより学習に興味・関心を高め、自ら学ぶ力を付けてほしい。

研究主題

未来の社会を創造する「自律的な学び手」の育成

～授業革新及び校務DXの推進を通して～

目指す児童像（「自律的な学び手」とは）

学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって学習に粘り強く取り組み、自分の学習活動を振り返って新たな学びにつなげることができる児童

研究仮説

単元構成や事象・題材との出会わせ方を工夫することで、自分事として学習に臨むことができるであろう。また、自らの学びを見通し、学びの成果や課題を振り返る学習活動を意図的に設定し、学び方を身に付けていくことで、目指す児童像に迫ることができるであろう。

研究主題に迫るための手だて 生活科・総合的な学習の時間を核として、各教科の授業革新を図る。

学びたい！

じっくり学ぶ！

もっと学びたい！

視点	学びを自分事にする	学びを見通す	学びを振り返り、つなげる
視点に 関して	学習との出会いを通して生まれた気付きや疑問を基に学習課題を設定し、その解決とともに気付き、疑問が発展していくサイクルで学習を進めていく。	授業や活動のゴール、学習を通して成長・発展した自分自身の姿をイメージして、粘り強く学習に取り組む。発達段階や児童一人一人の特性に応じて、何のために学習活動をしているのかが自分なりにしっかりと分かるようにする。	学習した結果や思考プロセス、自分の感情、変化や成長などを振り返る力を高める。視点をもって自己を見つめることで、次の学習への意欲、見通しに繋げることができることを実感させる。

1 研究の方法

○指導計画の見直し

児童の実態や地域、社会情勢に応じて、より良い指導ができるように、またより良い学習活動が展開できるように、年度当初と年度末に指導計画の見直しを行う。

○分科会ごとの研究授業

学年ごとの年間1回の（全6回）の生活科、または総合的な学習の時間の研究授業を実施する。児童の姿、研究授業協議会での意見、講師の先生の指導・助言から、成果と課題を明らかにし、研究主題にどの程度迫ることができたのかを検証する。

○関係書籍の本棚の設置

他校の実践事例や、研究紀要、参考文献等の書籍がいつでも自由に見られるように、本棚を設置する。

2 研究組織

研究全体会

研究の方針、計画の決定、研究推進部からの提案・報告に関する検討と共通理解、研究授業の協議

研究推進部

○校内研究に関する情報発信

・研推便りの作成 ・研究授業の成果と課題の検討、まとめ ・研究紀要の作成

○研究授業の諸準備・協議会の運営・記録

・指導案の形式作成 ・指導案検討 ・研究授業の記録写真、動画撮影
・協議会のもち方の検討 ・協議会の司会、記録 ・講師依頼

○研究に関する校内環境整備

・掲示物の作成 ・学習に活用する教材作成の補助 ・単元学習計画の展開例の作成や保存
・学年で使用した学習カードや開発、活用した教材・人材の取りまとめ

○研究主題に関する児童の実態分析

・児童の意識調査などのアンケート作成、印刷 ・アンケート結果の考察

○各種校内研修会の企画・運営

研究分科会

低・中・高学年の3つの分科会を作る。（専科はそれぞれの分科会に所属する。）各学年の実態に応じた指導案検討、授業の準備、授業の実践・考察、指導計画の改善、年度末の計画の振り返りを行う。

学年分科会

学年ごとの分科会を作る。（専科はそれぞれの分科会に所属する。）各学年の実態に応じた指導案検討、授業の準備、授業の実践・考察、指導計画の改善を行う。

(参考) 探究的な学習

文部科学省は、「探究的な見方・考え方」を働かせ、学習を行うことを通して、よりよい課題を解決し、自己の生き方を考えていくための「資質・能力」を育成することを目指している。この「探究的な見方・考え方」とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用するとともに、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けることとされている。

探究的な学習を進めるに当たっては、以下の学習の流れが大切である。

- ① 【課題の設定】 体験活動などを通して、課題設定をして課題意識をもつ
- ② 【情報の収集】 必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③ 【整理・分析】 収集した情報を、整理したり、分析したりして思考する
- ④ 【まとめ・表現】 気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

また、探究的な学習における児童の学習の姿として、以下のように示されている。

